

北海道伊達市有珠モシリ遺跡発掘調査概要報告

青野 友哉

AONO Tomoya

永谷 幸人

NAGAYA Yukihito

北海道伊達市有珠モシリ遺跡発掘調査概要報告

Overview on Archaeological Excavation of the Usumoshiri Site in Date City, Hokkaido

青野 友哉 AONO Tomoya
永谷 幸人 NAGAYA Yukihito

要 旨

有珠モシリ遺跡は北海道南西部の噴火湾東岸に位置する遺跡で、1985～1989年の札幌医科大学による発掘調査で縄文晩期から続縄文期にかけての墓趾と副葬品が見つかっている。筆者らは2018年からこの遺跡の測量と再発掘調査、遺物の再整理作業を行なっている。2020年9月の発掘調査では札医大調査時にすでに確認していた「18号墓」を再発掘し、最低でも11個体の人骨を含む多数遺体の再葬墓を検出した。本稿では北海道では類例のない多数遺体の再葬墓について、調査方法とその成果について報告する。

キーワード:縄文晩期 再葬墓 多数遺体

1. 研究の目的

伊達市噴火湾文化研究所は2018年から3ヵ年計画で、科学研究費助成事業「狩猟採集文化と農耕文化の接触による社会の変容と地域的多様性に関する学際的研究」【基盤研究(B)代表:青野 JSPS科研費18H00749】に取り組んでいる(2019年からは東北芸工大と共同実施)。本研究は、狩猟採集社会から稻作農耕社会へ転換する際に各地で存在した「続縄文」という過渡期の実態を把握し、狩猟採集文化と農耕文化の接触によって生じた社会変化のメカニズムを解明することを目的としている。そのため、両文化の接触が確実にあったと考えられる北海道伊達市有珠モシリ遺跡の出土品の再整理と、新たな発掘調査を実施し、弥生文化と続縄文文化の生業・墓制・交流等に現れる相互の関連性を明らかにすることとした。

研究は学際的に行うため、実施項目は多岐に渡る。具体的には、①貝塚出土動物種と海底ボーリングコアの海水温推定による環境変化と生業への影響の把握、②歯石の残存デンプン粒分析による植物性食料の復元および集団や文化による差異の検討、③埋葬環境判別法による合葬墓・改葬墓の再検討、④古人骨のDNA分析による血縁関係の把握と火山性フッ素摂取濃度分析による移入者の特定などである。

本稿ではこれらの研究のうち、2020年に実施した有珠モシリ遺跡の発掘調査の概要について報告する。

2. 調査要項

遺 跡 名:有珠モシリ遺跡
登 載 番 号:J-04-61
所 在 地:北海道伊達市有珠町102
調 査 主 体:伊達市教育委員会(教育長:影山吉則)
発掘担当者:青野友哉(東北芸術工科大学)・永谷幸人(伊達市噴火湾文化研究所)
調査参加者:西本豊弘(伊達市噴文研)・新美倫子(名古屋大博)・篠田謙一(科博)・添田雄二(北海道博物館)・奈良貴史・澤田純明(新潟医療福祉大)・藤原秀樹・富田啓貴(北海道教育庁)・加藤 竜(秋田県博)・加藤朋夏(秋田県教育庁)・菅野修広(登別市教委)・三谷智広(パレオ・ラボ)・渡辺双葉(北海道大学大学院M1)・加藤彩花・鈴木佳奈・松原奈々・加賀美宏輔・曽 光輝・岡山 慧・峯田太樹也・武田寛成・鈴木大翔・吉田 旭(東北芸工大)
整理作業参加者:石川 楓・川瀬理子・阿部なつみ・大城里佳子・高畑尚都・伊藤颯希・渡邊結羽・安田楓加・

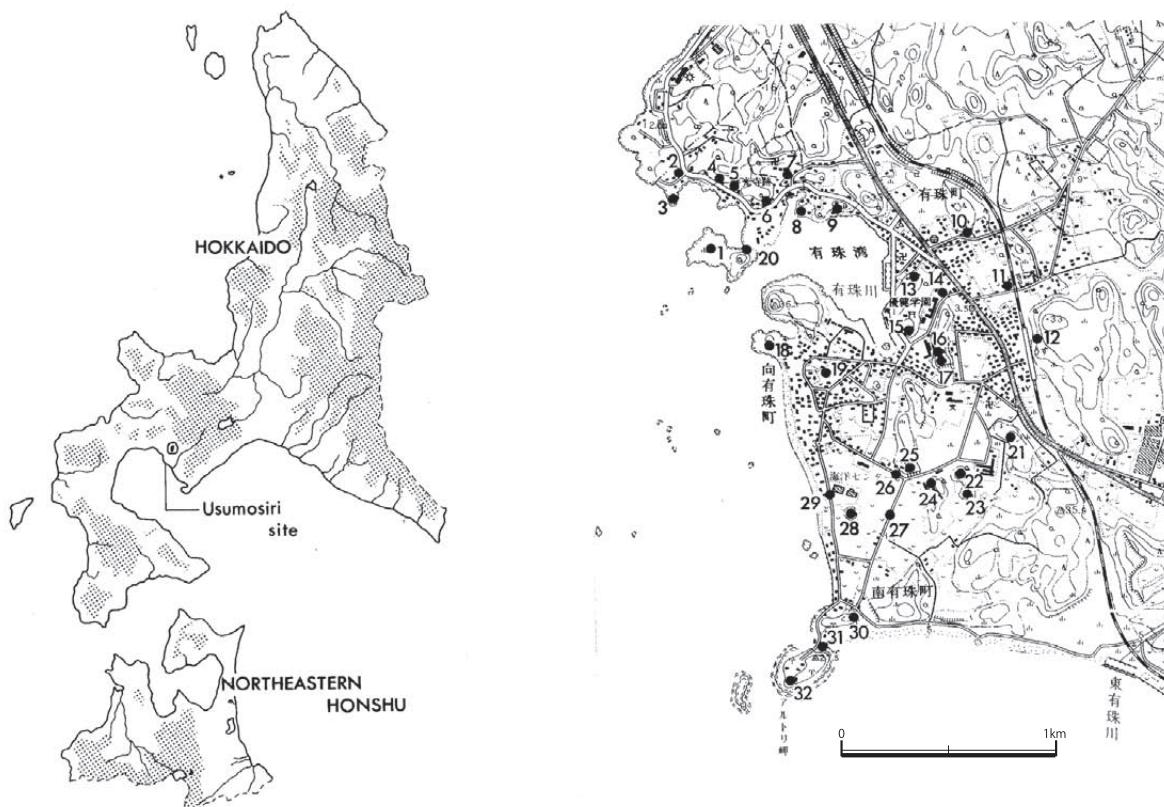


図1 有珠モシリ遺跡の位置と周辺の遺跡（1：有珠モシリ遺跡）

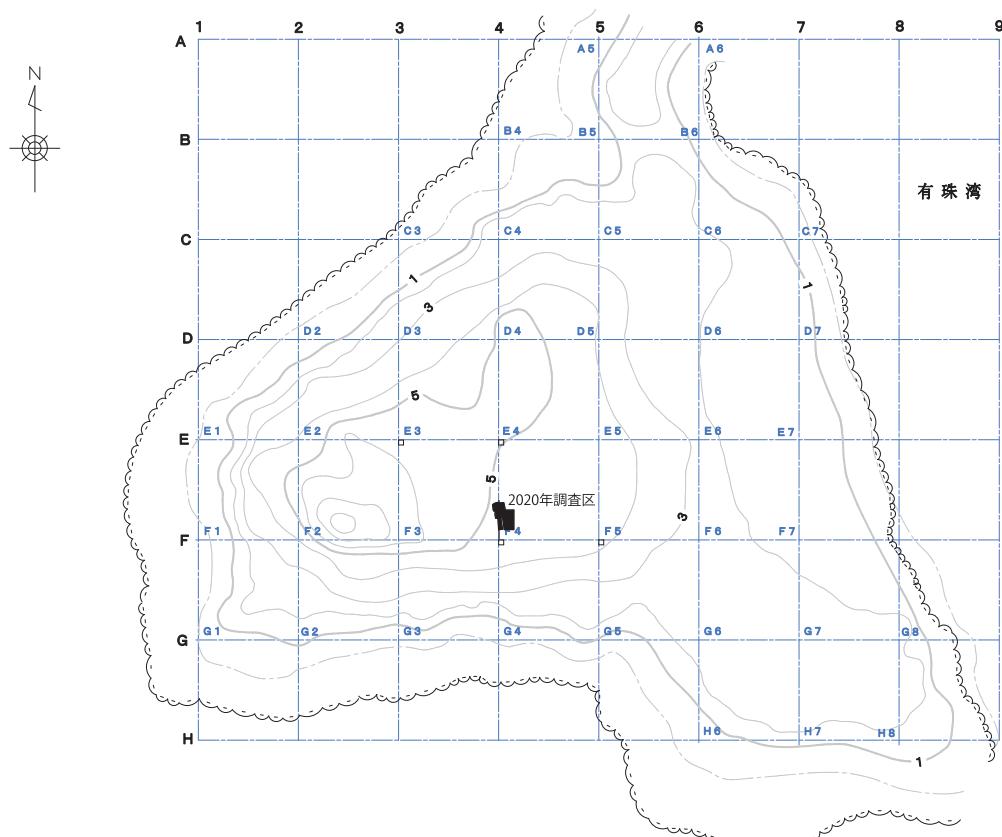


図2 大グリッドと2020年調査区(大グリッドは20m×20m)

伊藤悠人・閔 千秋・山田幸風・石川渙人・
野場智聰(東北芸工大)・加藤永理・柴野初音
(北海道大学)

調査面積:10m²

調査期間:2020年9月1日(火)~9月22日(火)

出土文化財:土器・石器・骨角牙貝製品・動物遺存体・人骨

出土数量:21箱[内寸679×367×122mm]

3. 遺跡の概要

(1) 遺跡の位置

北海道は縄文時代から近代まで多くの貝塚遺跡が存在し、道東の太平洋岸やオホーツク海沿岸など8つの貝塚密集地帯が存在する(永谷2014)。中でも東京湾や仙台湾、三河湾と並ぶ日本有数の貝塚地帯として知られるのが道南西部太平洋側の噴火湾(内浦湾)地域である。

有珠モシリ遺跡は噴火湾東岸の伊達市有珠地区に所在する。遺跡は有珠湾の湾口に位置する約10,000m²の小島中にあり、遺跡からは北東に活火山である有珠山を、南に噴火湾越しに森町の駒ヶ岳を望むことができる。島は10,000年以上前の有珠山噴火に伴う岩屑なだれ堆積物が基盤となっており、安山岩の巨石が地上に顔を出している。島の標高は0~8mで、中央部の5m付近には平坦面が存在する。現況は草木地で、干潮時には陸続きとなるため歩いて渡ることができる。

島にはかつてアイヌの共同墓地があったとされ、一部の地番(有珠町101)は地域住民の共有地となっている。調査に際しては共有地に立ち入らず、他の区域でもアイヌ墓が検出された場合は発掘をしない方針である。

なお、海に接する国有海浜地は有珠漁港区域内の公共空地として北海道が管理している。

(2) 既往の調査

1985~1989年の札幌医科大学解剖学第二講座による発掘調査(以下、札医大調査と呼ぶ)では縄文晚期から続縄文期にかけての墓趾と副葬品が見つかっている。中でも本州以南との交流を示す南海産イモガイ製腕輪や写実的なクマが彫刻された匙型製品の出土により続縄文文化の内容を示す遺跡として知られるようになった。

札医大調査は島の中央西寄りの緩斜面に調査区(以下、札医大調査区と呼ぶ)を設け、5年間で約80m²を発掘して墓趾を21基検出している。調査区内には縄文晚期と続縄文前半

期(恵山文化期)の貝層が存在し、続縄文期の墓趾のほとんどは縄文晚期の貝層を掘り込んで作られている(大島2003)。墓は再葬墓・改葬墓が多いことから、貝層中に部分骨が多く含まれている。

出土人骨は形質人類学および分子人類学による研究が進められ、北海道の人の成り立ちを明らかにする成果を上げてきた。考古学的にも概略のみの調査報告がなされただけにも関わらず、続縄文文化の内容を良く示し、かつ本州以南の弥生文化との交流を示す遺物が出土したことから多くの書籍や展示図録に引用されている。なお、札医大調査時の出土遺物はすべて重要文化財に指定されている。

2018年には伊達市噴火湾文化研究所が中心となり科研費事業の一環として有珠モシリ遺跡の再整理・再発掘による研究を開始した。まずは札医大調査の出土遺物を再整理し、これまで報告されてこなかった墓坑出土の土器破片や石器、骨角牙貝製品などの図化を行なった。動物遺存体の再整理では、貝層に多くのイノシシの骨と歯が含まれることも明らかとなった。

また、遺跡の地形測量調査ではコンタ図の作成と、翌年度からの発掘調査用に大グリッドの設定を行った。

2019年には遺跡全体の概要を把握するための分布調査と札医大調査区の再発掘を行なった。分布調査は一辺20m四方の大グリッドを設定し、グリッドの交点を1m×1mの範囲で試掘するもので、この年は3箇所を試掘した。その結果、1663年降下の有珠山火山灰(有珠b火山灰)の下層に続縄文期の遺物を含む礫層が遺跡の広い範囲に堆積していることが確認された。礫層の下には縄文晚期~続縄文期の遺物包含層が存在している。

札医大調査区を再発掘する目的は、新たな掘削を最小限にとどめつつ、かつて2個体分の人骨を確認して埋め戻した「18号墓」を再検出し、現在の調査手法により発掘と記録を行うことにあった。2019年には18号墓の位置を特定し、新たに調査区を拡張(2m×1.5 m)して墓の上部にある続縄文期の礫層と貝層を調査した。礫層と貝層からはヒトの部分骨や動物骨、人工遺物が多く出土している。この年は墓趾の上面までたどり着かず調査は終了し、埋め戻した。

4. 発掘調査の方法

2020年の調査は、前年に拡張した(2m×1.5 m)の範囲を含む位置に4m×4 m の調査区(1区)を設定し、面的に掘り下げるのこととした(図3)。

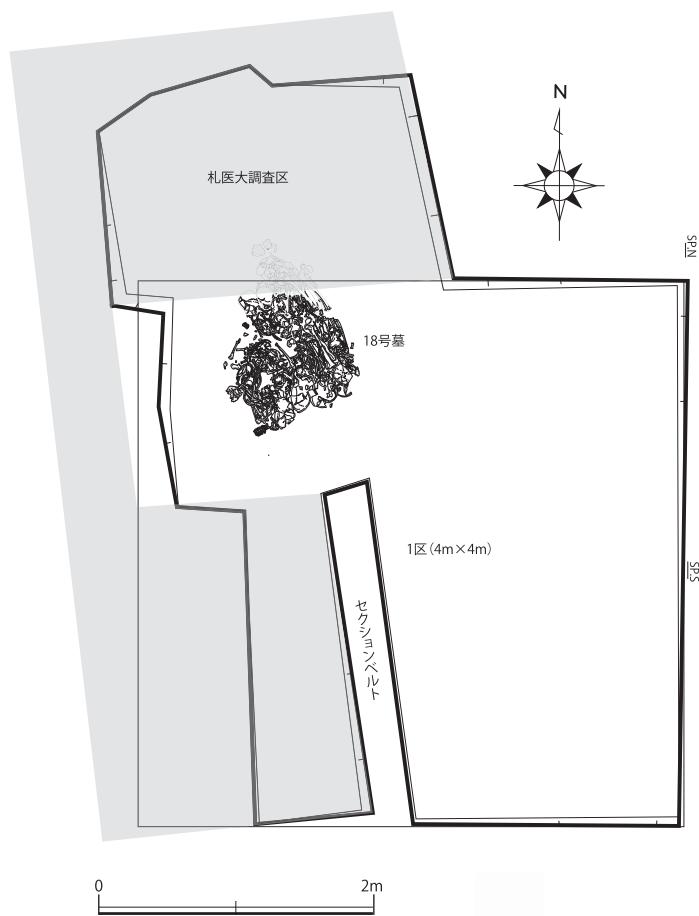


図3 調査区及び遺構配置図

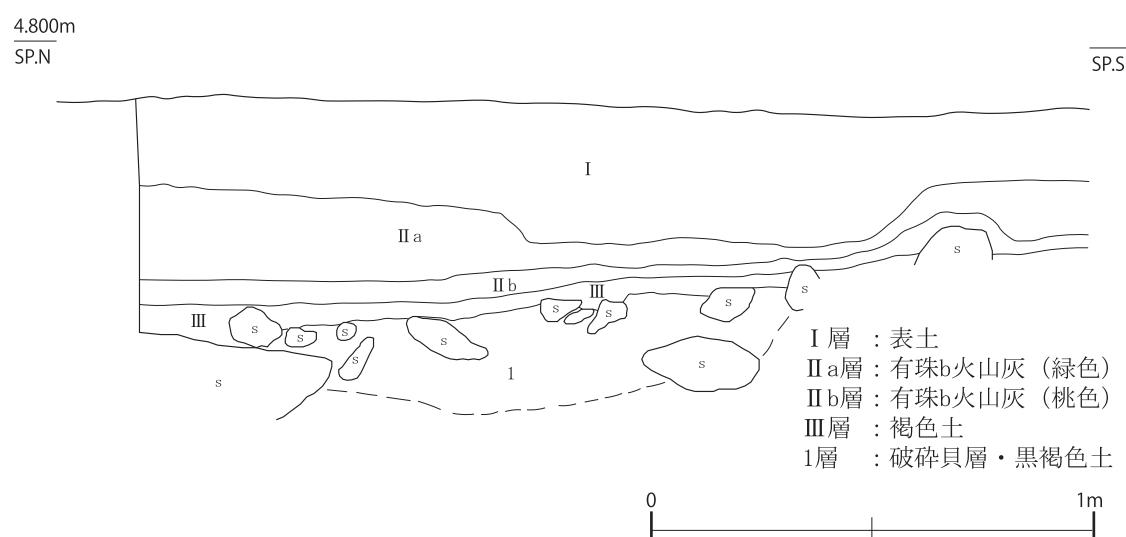


図4 1区東壁土層断面図

調査区の掘削は人力で行い、表土層と有珠b火山灰まではスコップで、基本土層のⅢ層以下は移植ゴテで掘り進めた。遺物はⅢ層以下から出土し、破碎貝層である1層と混貝土層である2層からは縄文晩期～続縄文期の遺物が多く出土した。遺構外の遺物は層位ごとに一括して取り上げたほか、骨角牙貝製品や石刀、土製耳飾りなどの特徴的な遺物は出土位置を図面と写真で記録した。1区の18号墓以外の範囲は2層上面まで掘削し、埋め戻している。

また、1区の南西部からは札医大調査で埋め戻されたブルーシートが見つかり、南北方向に直線的に伸びるかつての調査区壁面を検出した。この部分は遺跡の基盤と各土層の確認のため再掘削を行った。

5. 18号墓の調査

(1) 調査の経緯と経過

18号墓は、札医大調査時に調査区壁面で人骨の頭部2個体

分を確認したものの、調査終了日間近であったために取り上げずに埋め戻したものである。

2019年度の調査時には札医大調査区の壁面に沿って赤色の角閃石安山岩3枚が並んでいたが、そのうちの2枚は18号墓を埋め戻した後に、目印として置かれたものであった。これは2020年調査の初日に2枚の角閃石安山岩を取り除いて掘り進めると「18号墓」と書かれたビニール袋が出てきたことから判明した。なお、もう1枚の角閃石安山岩は攪乱されていない南側壁面中に存在しており、のちに18号墓の壙口部に置かれた上部構造の一部であることがわかった。

調査開始時の18号墓は壙底部の一部の人骨が露出しているものの墓坑の上面は確認できていなかった。そこで、墓坑のプランの確認と土層観察用のベルトの設定、墓坑内の掘削、土層断面図の作成、人骨の清掃を順に行なった。その際、墓坑の平面プランが想定以上に大きくなることが判明し、それに合わせた土層断面図の作成箇所の変更やエレベーション図の作成などの対処を行なった。

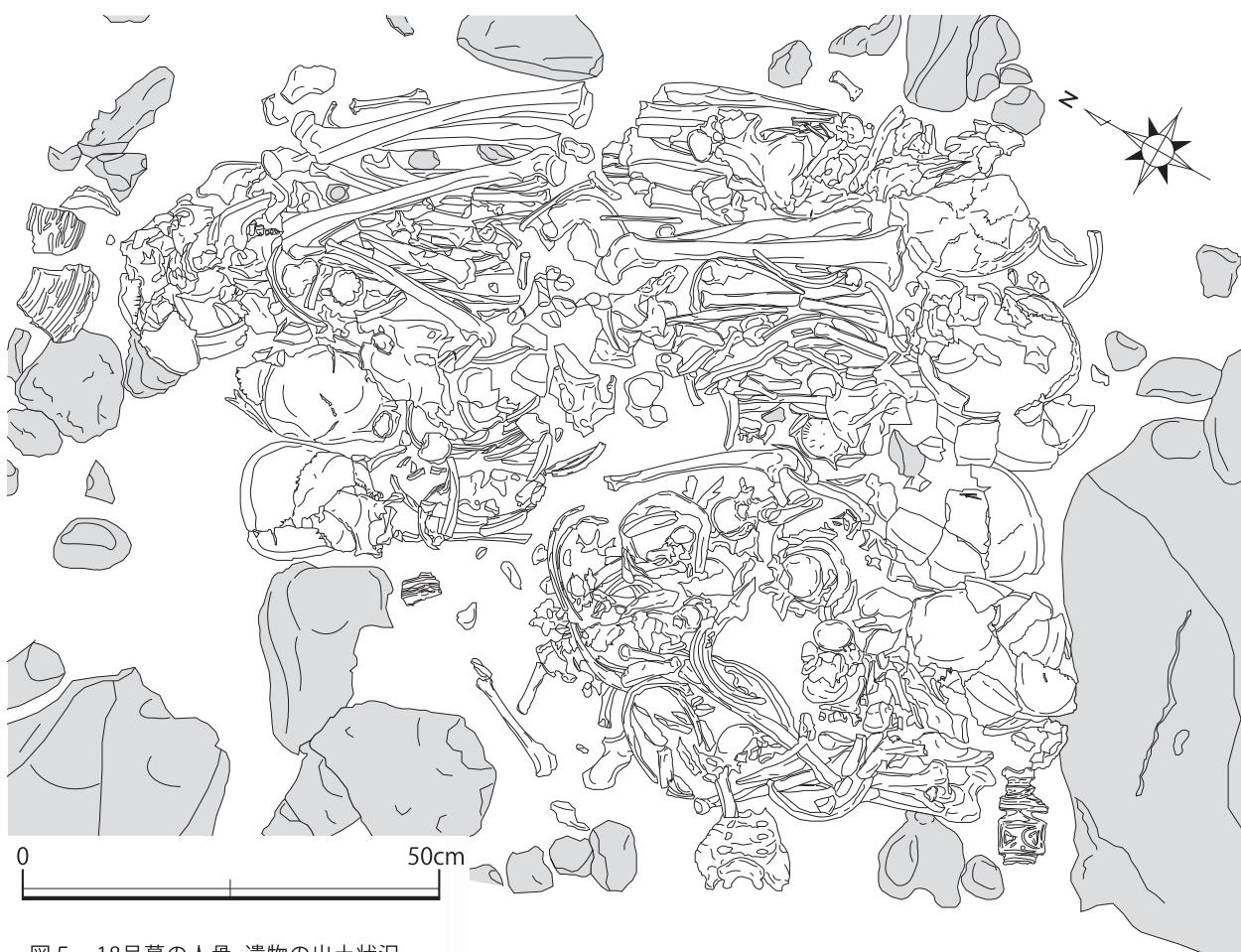


図5 18号墓の人骨・遺物の出土状況

(2) 18号墓の概要(図5、写真3~7)

18号墓は、平面が直径約1.2mの円形の墓坑内に11個体の頭骨を含む人骨群が出土した。墓趾は有珠山岩屑なだれ堆積物である巨岩の隙間に掘られている。時期は墓坑覆土および底面付近から大洞A'式併行の土器が出土しており、現段階では縄文晩期末と考えている。次年度以降に墓坑底面の精査を行う際に、時期決定を行う予定である。

人骨の出土状況は、墓坑の北壁と南壁に頭骨が列状に並び、中央には束ねられたように長軸方向が揃った四肢骨が集中し、寛骨と肋骨の集中箇所がそれぞれあった。また、墓坑全体から指骨などの手足の骨が多数出土している。列状の頭骨の顔面は、北壁の4体のうち3体が南を、南壁の7体のうち6体が北を向いており、向かい合った状態にある。また、上顎と下顎が接した頭骨や、大腿骨遠位端に膝蓋骨が接している例があるものの、大半の人骨が解剖学的位置関係になく、かつ頭骨の配列や部位ごとの集中といった意図的な配置がみられる。このことから18号墓は再葬(複葬)墓といえる。

土層断面を観察すると、墓坑上部に扁平な円礫(長径約40cm)と角閃石安山岩が並び、礫と礫の間に焼土と灰層がある(写真4)。その下位には白色の海砂がレンズ状に堆積している。さらに下位には微粒の貝殻を含む黒褐色砂質土が堆積し、人骨を覆っている。人骨付近にはベンガラが存在する箇所もあった。

人骨・遺物の出土状況図の作成は写真実測によることとし、墓坑の上に固定したデジタルカメラで数次にわたる遺物の取り上げ状況を記録した。取り上げの方法は、写真撮影したデータをその場でノートパソコンに取り込み、画像編集ソフト上で1点ずつ番号を振り、それに基づいた番号を付した袋に入骨・遺物を入れた(遺物は標高も記録している)。その後、下層の人骨・遺物を清掃して再び写真撮影を行った。この一連の工程を21回行うことで人骨の部位と出土位置を正確に記録した。本稿には最上面の実測図を示している(図5)。

2020年の調査は人骨・遺物を取り上げた時点で終了とし、墓坑底面の精査は次年度に持ち越した。そのため、本稿には墓坑平面図・断面図は掲載していない。調査区はブルーシートと土嚢で埋め戻している。

6. 成果と課題

今回検出した多数の遺体を集積した再葬墓は、北海道内の八雲町栄浜1、恵庭市カリナバ、厚真町朝日、釧路市幣舞な

ど各遺跡検出の「多数合葬墓」とは異なり、遺体を再埋葬する習俗の存在を示している。再埋葬人骨を主体とする墓の類例は、取手市中妻、松戸市牧之内、市川市権現原、田原市吉胡・伊川津・保美など、東北南部から東海にかけての縄文後・晩期の遺跡に見られ、地域を超えた再葬原理の解明も課題となる。

18号墓の調査において詳細に記録した人骨の出土状況と土層断面の観察からは、埋葬環境の判別と埋葬過程の復元が可能である。すでに札医大調査では続縄文期の再葬墓とともに、再葬目的で掘削を受けた縄文晩期の一次葬墓が検出されており、18号墓との関連性の整理が必要である。そのためには18号墓と札医大調査の出土人骨との接合や遊離歯に着目した同一個体の判別が有効である。また、札医大調査区の再発掘により、正確な調査区と各墓坑の位置関係を把握することも基本的でありながら重要である。

現在は遺物の実測・トレース作業のほか、人骨の接合関係や出土位置から遺体の埋葬環境を把握する基礎的作業を行っている。2021年の発掘調査では墓坑底部を精査し、墓の時期の決定と墓坑構造の把握を行う予定である。

調査・報告にあたり、下記の機関および個人より指導・助言を得た(敬称略)。

大西善幸、木村国夫(伊達アイヌ協会)、岩田廣美(いぶり噴火湾漁協代表理事組合長)、帆江妃呂己、小杉 康・高瀬克範・國木田大(北海道大学)、村本周三(北海道教育庁)、福井淳一(北海道埋文)、白石哲也(山形大学)、北海道教育庁、伊達市教育委員会、洞爺湖町教育委員会

参考文献

- 大島直行 2003「III. 有珠モシリ遺跡の概要」『図録 有珠モシリ遺跡』
北海道伊達市教育委員会 pp.35-58
永谷幸人・松田宏介・吉田力・福田裕二 2014「北海道貝塚地名表」『日本考古学協会2014年度伊達大会研究発表資料集』pp.1-44

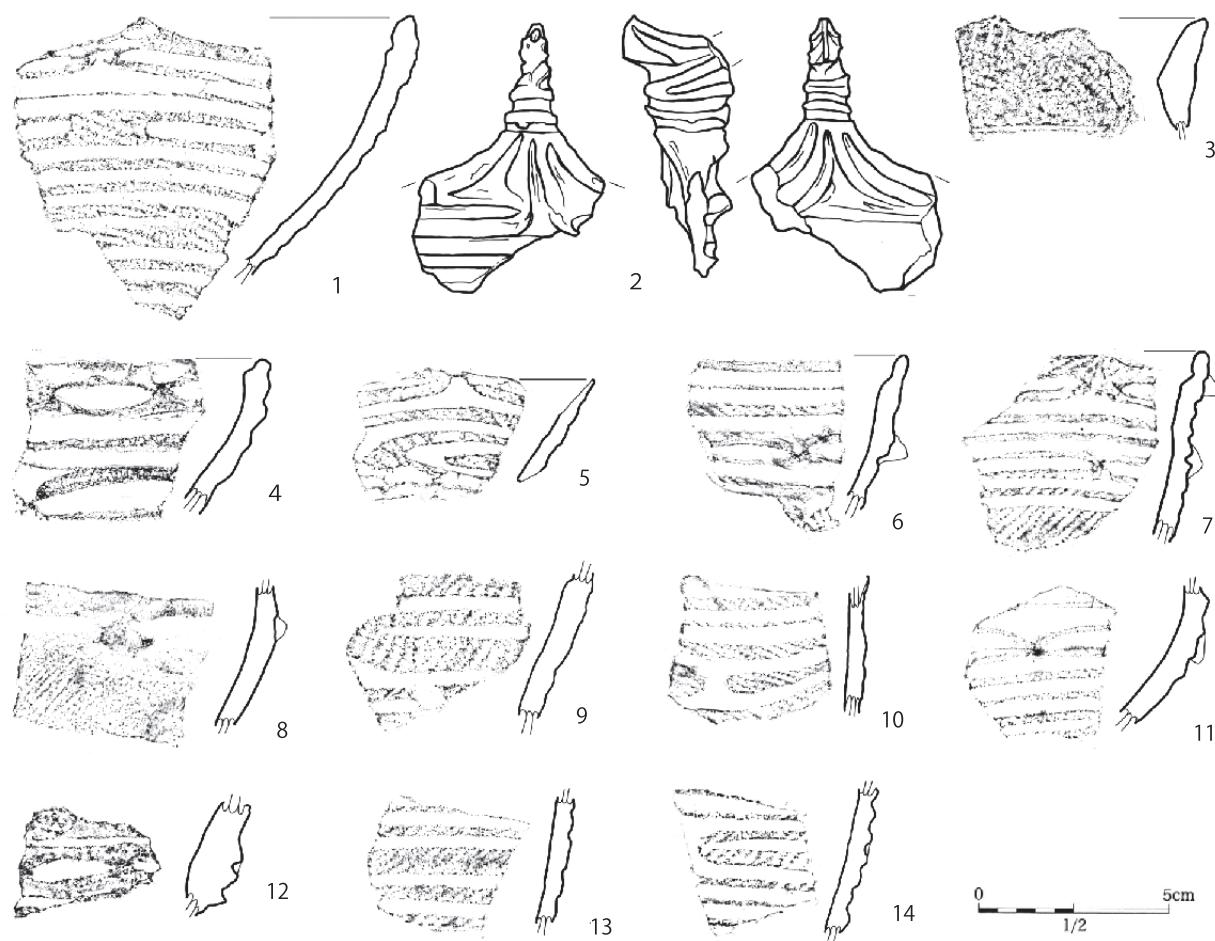


図6 2019年拡張区III層出土土器(18号墓上)〔縄文晩期〕

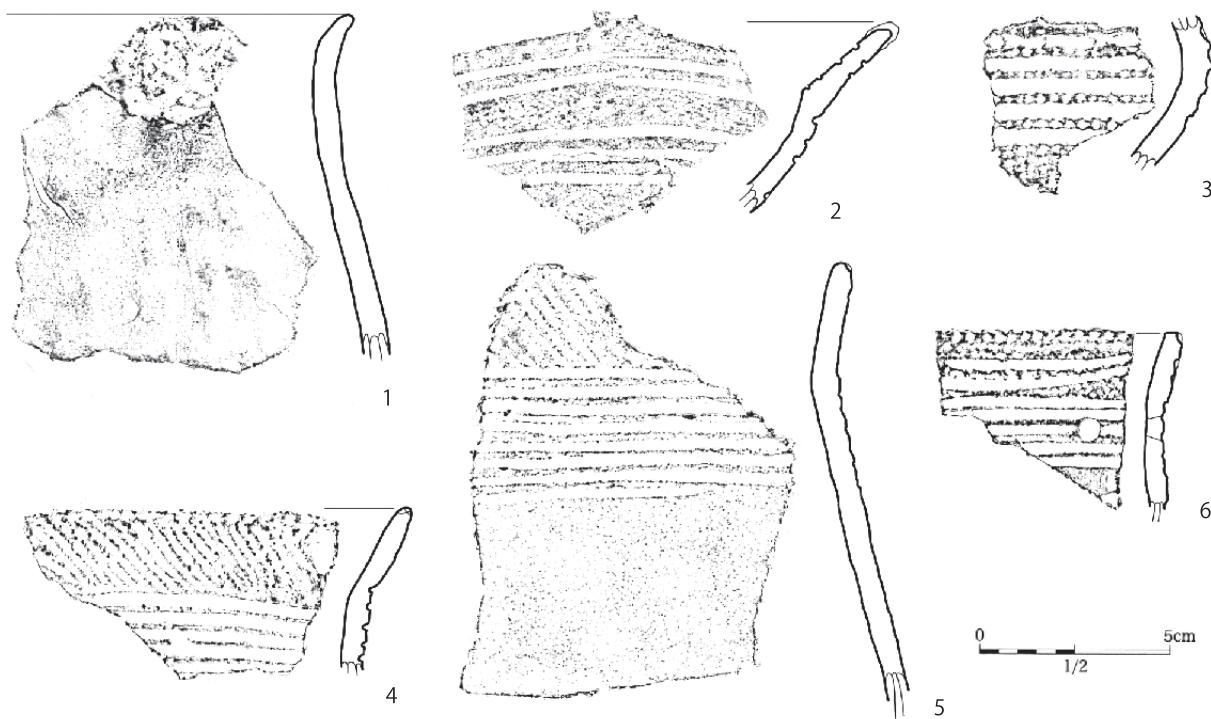


図7 2019年拡張区III層出土土器(18号墓上)〔続縄文期〕



写真1 有珠モシリ遺跡全景(南から撮影)
写真手前の島が遺跡・奥が有珠山



写真2 土製耳飾りの出土状況



写真3 18号墓の調査(北から撮影)
墓の手前が札医大調査区



写真4 18号墓の土層断面(北から撮影)



写真5 18号墓北側の頭骨列(南から撮影)



写真6 18号墓の人骨取り上げ後(北から撮影)



写真7 18号墓人骨の出土状況(北から撮影)



写真9 土製耳飾り(18号墓上部出土)

4

5



写真9 土製耳飾り(18号墓上部出土)

写真10 石刀(1区出土)